

コロナ禍における生存学研究所の情報保障について

——総括編——

橋 口 昌 治
(大谷大学)

1. はじめに

2019 年末に始まった「新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)」の世界的な流行、いわゆる「コロナ禍」においては、感染防止の観点から、人が移動し、集まることが望ましくないこととされるようになった。登壇者や聴衆に集まってもらうことが難しくなったため、研究機関がシンポジウムなどをオンラインで配信することも、「コロナ禍」以前とは比べ物にならないほど増えている。立命館大学生存学研究所も、2020 年 6 月にオンライン事務局を立ち上げ、「コロナ禍」における情報発信、情報保障のあり方を模索してきた。

オンライン事務局の取り組んできた課題は、大きく 2 つに分けられる。1 つ目は、単なる情報発信ではなく、ユニバーサルな情報保障のともなう情報発信を実現することであり、2 つ目は、韓国、中国、台湾、日本の 4 グループで行ってきた障害学国際セミナーの主催者として、オンライン上でセミナーを開催し、それを配信することである。

それぞれの企画に焦点を当てた詳しい報告は、つづく安田智博、中井良平両氏に譲るとして (いずれもオンライン事務局のメンバー)、ここでは、報告全体の目的や各企画の概要などを簡単に述べていきたい。

2. 報告の目的

今回対象とする 2020 年 7 月から 21 年 9 月にかけての取り組みでは、うまくいった点と、うまくいかなかった点があった。報告の第一の目的は、それを記録することである。2020 年代初頭、「コロナ禍」、Web 会議システムの急速な普及といった状況において、「情報保障」をめぐる発想や技術の試行錯誤 (何ができ、何ができなかったか、何が求められていたか、何に気づけなかったか、など) について記録を残しておくことは、意義のあることではないかと考える。

次に、報告を広く公開することによって、失敗も含めた事務局の経験、ノウハウを共有したいと考えている。その目的は、何よりも、今後シンポジウムなどで情報保障を担当することになった人が困ることなく、より良い情報保障ができるようになることである。我々にも、知っていれば回避できた問題があった。それは、知っている人は知っていたことであり、今後そのようなことで情報保障が実現せず、企画に参加できない人が出てしまうことは避けなければならない。

さらに試行錯誤を通して、現状では、情報保障のために必要な機能が十分に提供されていないことも分かった。例えば、手話通訳者の映っている画面の位置や大きさは、固定されていなければ内容を追いにくくなってしまふ。しかし利用したサービスにおいて、それを実現する機能がなく、なるべく動かないようにするためにはどうすればいいか、既存の機能を組み合わせ、何パターンも試して確認する作業を行なった (詳しくは安田報告)。情報保障の観点から、普及する Web 会議システムが抱える問題点を、可能な範囲で指摘し、今後の改善につなげてもらうことも、目的の一つとして掲げたい。

次節では、事務局が関わってきた企画 (表 1 を参照) のうち、今回主に扱う障害学国際セミナーと障害学会の概要について説明していく。

表 1 オンライン事務局の関わった企画

開催日	企画名称
2020 年 7 月 5 日	土曜講座代替企画 「ウィズコロナ／アフターコロナのアクセシビリティ」 (http://www.arsvi.com/a/20200705.htm)
7 月 18 日	障害学国際セミナー 2020 「東アジアにおける新型コロナウイルス感染症と障害者」 (http://www.arsvi.com/a/20200718.htm)
9 月 19 日	障害学会第 17 回大会・2020・オンラインシンポジウム 「動かなかったものを動かす——「筋ジス病棟の未来を考えるプロジェクト」」 (http://www.arsvi.com/ds/jsds2020s.htm)

2021年2月27日	障害学国際セミナー・オンライン特別セミナー 「新型コロナウイルス感染症と東アジアの障害者」 (http://www.arsvi.com/a/20210227.htm)
9月25日	障害学会第18回大会・シンポジウム企画 「パンデミックにおける障害者の生」 (http://jsds-org.sakura.ne.jp/18-2021taikai/#sympo)

資料出所) 筆者作成

注1) 各企画の概要や報告者の資料などは、URLを記載しているページで見ることができる(取得日は、いずれも2022年2月8日)。ページには、参加者を募る際の記事も掲載されており、「手話通訳が必要な方は、表示方法を「スピーカービュー」ではなく「ギャラリービュー」とすることをお勧めいたします。」といった参加者に向けた注意点などを読むことができる。これらの情報も、企画を運営する際に参考になると考える。

ちなみに、障害学国際セミナー2020において、参加者の登録のためにGoogleフォームを用いていたところ、対応していない読み上げソフトもあり、視覚障害者にとってバリアになっているとのご意見をいただき、それ以降メールでの受付も並行して行うことにした。

注2) オンライン事務局は、2022年2月26日・27日開催の障害学国際セミナー2022「障害者の地域での自立生活」にも関わっている。

3. オンライン事務局の関わった企画の概要

3-1. 障害学国際セミナー2020の概要

障害学国際セミナーは、障害学に関わる研究者、当事者を中心とする研究交流である¹⁾。韓国、中国、台湾、日本の4グループによって開催されてきた。基礎となっているものは、生存学研究所の前身である「生存学研究センター」と、韓国の「障害学フォーラム」との間で2009年度より開始された連携関係である。2010年にソウル市にあるイルムセンター、11年に立命館大学衣笠キャンパスで、「障害学国際研究セミナー」("Korea Japan Disability Studies Forum")を開催し、2012年より「障害学国際セミナー」に名称を変え、相互に開催地・主催を交代してきた。その後2014年度に中国の市民社会組織が参加し、2015年度より3か国によって共同開催される"East Asia Disability Studies Forum"となった。2016年に台湾のグループが初めて参加し、それから4グループで開催する体制が続いている。これまで開催された場所は、ソウル市、立命館大学(京都市、茨木市)、北京市、アサン、牙山市、台北市、武漢市である。

2019年10月11日から13日に武漢市でセミナーが開催された後、COVID-19の流行が始まり、2020年の主催者である生存学研究所には、どのような形式での開催が可能か、検討することが求められた。そのようななかオンライン事務局は立ち上げられ、6月16日に、セミナーに向けた第1回のオンライン・ミーティングが行われた。

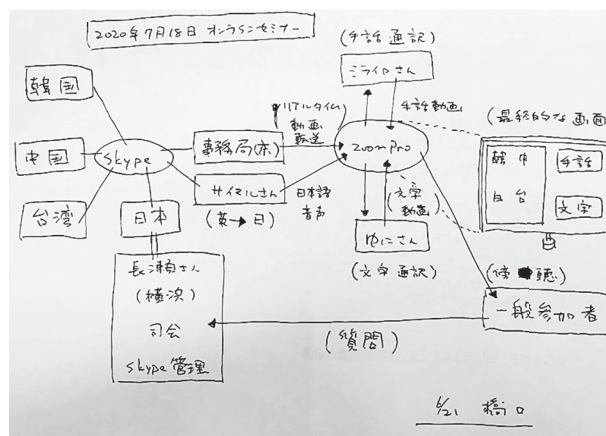


図1 障害学国際セミナー2020の配置図

資料出所) 筆者作成

注1) 英語から日本語への通訳を株式会社サイマル・インターナショナル、手話通訳を株式会社ミライロ、文字通訳を特定非営利活動法人「ゆに」に依頼した。

注2) 図では、「ゆに」から文字動画がZoom Proに配信されるように書かれているが、実際は、字幕は文字通訳アプリケーション「captiOnline」を用いて送出された。

注3) 初めての試みを、顔を合わせずにオンラインで準備することもあり、認識に齟齬が生じないよう図を多用した。「人」と「Web会議システム」と「情報の流れ」と「視聴者が見る画面」の全体像を把握することに苦労した記憶がある。図は完成に近いものであるが、最終的に質問は受け付けなかったことになった。

そこで、登壇者や参加者の移動が難しいこと、各グループで利用できるWeb会議システムが限られていること、Web会議システムを用いれば、これまで参加が難しかった人々にも参加してもらえることなどの認識が共有された。その上で機材やアプリに関する情報を収集し、Skype上でセミナーを行い、その動画をリアルタイムで転送し、日本在住者向けにZoomで配信するという方法を採用することにした。

また従来のセミナーでは、各グループが普段用いている言語で話し、同時通訳によって意思疎通を図っていた。しかしそれが今回は難しいということで、英語でセミナーを行い、配信では日本語への同時通訳、手話と文字通訳を付けることになった(図1を参照)。そして、第1回ミーティングから7月18日の開催当日までに、配信方法(Web会議システム・機材)の決定、必要な機材の購入、二度の接続テスト(一度目は事務局内のみで、二度目は通訳者たちも含めて)、安定した配信の行える部屋と機材の確保、企画の広報と参加者の受付などを行なった。詳しくは中井報告を読んでいただきたい²⁾。

3-2. 障害学会第17回大会の概要

障害学国際セミナーの開催後、障害学会第17回大会におけるオンラインシンポジウム「動かなかったものを動かす——「筋ジストロフィー」の未来を考えるプロジェクト」

(2020年9月19日)の配信への協力を依頼された。これは生存学研究所の所長である立岩真也・立命館大学教授が「筋ジス病棟の未来を考えるプロジェクト」に関わった方々にお話を伺っていくシンポジウムであった。

障害学国際セミナーがSkypeとZoomの2つのWeb会議システムを使用したのに対して、障害学会ではZoomのウェビナーのみを使用した。登壇者、参加者、通訳者(手話、文字)が同じシステムに入室するので、動画の転送は不要であった。また英語から日本語への通訳もなく、障害学国際セミナーに比べると、システムとしてはシンプルなものであった。しかし、話者が頻繁に入れ替わる座談会のような進行であったのに対して、話者や手話通訳者の画面の大きさ・位置を固定させること、話者に名乗ってもらうことなどを徹底できず、誰が何を話しているのかが追いつらいなど、バリアの多いシンポジウムになってしまった。利用するシステム、企画の内容、そして当日の進行が噛み合わなければ、十分な情報保障は実現できないことを痛感し、第18回大会で、その反省を活かすことになった。詳しくは安田報告を読んでいただきたい。

3-3. 障害学国際セミナー「オンライン特別セミナー」の概要

COVID-19の流行が収束する気配を見せないなか、2021年2月27日にも、生存学研究所が主催となり、「オンライン特別セミナー」として障害学国際セミナーが開催されることになった。今回も、Web会議システム(今回はシスコ社系のWebex)上で行われるセミナーの動画を、リアルタイムで転送し、Zoomで配信するという形式を採用した。ただし、7月のセミナーでは登壇者間の同時通訳が難しく、英語を使用してもらったが、今回は普段使っている言語による報告、討論を実現するために、日本コンベンションサービス株式会社と契約し、同社の遠隔同時通訳プラットフォーム「RSI X」を利用することになった。それに対応するために、パソコン間の動画転送には7月と同様に「キャプチャーボード」を使用し、「RSI X」からの通訳音声については「ミキサー」を別途接続し、音量の調整を行った(図2を参照)。

当日は、通訳音声の一部乱れが生じてしまったため、十分な情報保障が行えたとは言えない結果になってしまった。もちろん事前に接続テストを行っていたが、当日使用する機材、関係者の接続環境を全て確認できていたわけではなかった。また、各々遠隔で作業を行っていることも、トラブルが生じた際に、原因を特定し必要な対処

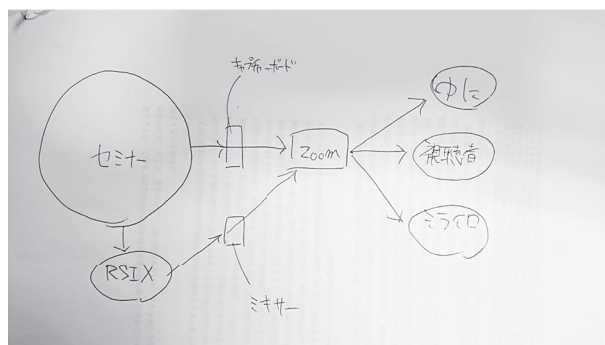


図2 障害学国際セミナー「オンライン特別セミナー」の配置図
資料出所) 中井良平氏作成

注1) 遠隔同時通訳プラットフォーム「RSI X」の利用について日本コンベンションサービス株式会社と契約し、手話通訳を株式会社ミライロ、文字通訳を特定非営利活動法人「ゆに」に依頼した。

注2) 図では、「Zoom」から「ゆに」と「ミライロ」に向けて矢印が伸びているだけである。しかし、この図では「ミライロ」から「Zoom」へと向かう矢印が省略されている。ミライロ所属の手話通訳者は、「Zoom」を通して届けられる日本語音声を聴きながら手話通訳を行い、それをカメラで映し「Zoom」に発信していた。また「ゆに」は、「Zoom」を通して届けられる日本語音声を文字にし、文字通訳アプリケーション「captiOnline」を用いて送出していた。

音声の乱れがたびたびあったにもかかわらず、通訳者の方々には冷静に対処していただいた。この場を借りて、お礼を申し上げます。

を迅速に行うことを、より難しくしているのではないかという印象を持った。企画を進行させながら、メールや電話などでお互いに連絡を取り合っていたが、結局原因は特定できず、問題が完全に解決することなく企画は終了した。

3-4. 障害学会第18回大会の概要

第17回につづき、第18回大会においても、シンポジウム企画のオンライン配信を担当することになった(2021年9月25日開催)。テーマは「パンデミックにおける障害者の生」であり、第1部「1組10分でのリレートーク」と第2部「シンポジウム」という構成であった。Web会議システムは、Zoomのウェビナーを使用した。

前回の反省を活かすために、大会長の山下幸子・淑徳大学教授と綿密な連絡を繰り返した。そして、オンライン配信に詳しい方々の協力を仰ぎ、障害当事者の意見を聞きながら、ユーザーインターフェースの確認も行った(具体的には、文字情報保障の閲覧方法として、①captiOnlineウェブサイトでの閲覧、②Zoomの字幕(CC)機能での閲覧、③手話通訳と同様にZoom上に文字情報を表示のいずれがよいか、など)。詳細については、安田報告を読んでいただきたい。

ここでは、企画に向けて作成された進行表を、匿名化し紹介したい(表2)。これは、「利用するシステム、企

画の内容、そして当日の進行が噛み合わなければ、十分な情報保障は実現できない」という第17回大会の反省をもとに作成されたものである。これをフォーマットにして当日の進行表を作成し、登壇者も含めたりハーサルを実施しておけば、円滑な進行と情報保障を実現できる可能性が高まると考える。

表2 進行表の例

12:00	<p>■「リハーサル」開始</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手話通訳、文字通訳の方々と登壇者との間で、使う用語の確認などを行う。 ・司会の方々と一緒に、一通り全体を流して、設定や操作の確認をする。 <p>■12:50 シンポジウム開始に備え、画面・音声の最終確認を行う。</p> <p>※手話通訳者の画面が開始とともに映るように準備しておく。</p> <p>最終確認終了後、ウェビナー開始。</p> <p>「まもなく開始」のスライド投影と、音楽を流す（音楽が確認できると、視覚障害のある人にとっては、「Zoomに入れた」ということが確認できるため）。【〇〇さん担当】</p> <p>レコーディング開始（〇〇さん担当）</p>
13:00	<p>■シンポジウム開始／開会あいさつ</p> <p>【画面】司会〇〇さん、手話通訳、文字通訳</p> <p>↓</p> <p>◆△△さんよりご挨拶</p> <p>※文字通訳について。captiOnline 利用者が各自で映すとともに、必要に応じて画面上の文字通訳も見ていただく</p> <p>司会：「△△さん、ビデオ・マイクをオンにしてください」</p> <p>司会のビデオ・マイクをオフにする</p> <p>↓</p> <p>【画面】△△さん、手話通訳者、文字通訳</p> <p>↓</p> <p>◆△△さん挨拶</p> <p>△△さん：冒頭で名乗る。挨拶終了後、ビデオ・マイクをオフ</p> <p>↓</p> <p>【画面】司会、手話通訳者、文字通訳</p> <p>↓</p> <p>※以下、省略</p> <p>↓</p> <p>◆司会より、先の登壇者へのお礼、第1部終了と休憩のお知らせ</p> <p>↓</p> <p>【画面】「休憩中、14時30分再開」のパワポスライドを運営スタッフで投影</p> <p>↓</p> <p>◆休憩（14時10分～14時30分）</p> <p>◆14時29分【画面】司会、手話通訳者、文字通訳</p>
14:30	<p>■第2部 シンポジウム</p> <p>↓</p> <p>【画面】司会、手話通訳者、文字通訳</p> <p>↓</p> <p>◆司会よりご挨拶、進行（5分間）</p> <p>※このタイミングでQ & A機能を使って視聴者から質問を募ることをアナウンス。</p>

<p>↓</p> <p>◆司会より登壇者××さんの紹介</p> <p>司会：××さん紹介の後、「××さん、ビデオとマイクをオンにしてください」→司会：ビデオ・マイクをオフにする</p> <p>××さん：ビデオ・マイクをオンにする。<u>名乗ってから発言開始。</u></p> <p>↓</p> <p>【画面】××さん（資料があれば、ご本人→資料の画面共有）、手話通訳者、文字通訳</p> <p>（14時35分～55分）（20分間）</p> <p>↓</p> <p>◆××さん終了</p> <p>××さん：ビデオ・マイクをオフにする</p> <p>司会：ビデオ・マイクをオンにする</p> <p>↓</p> <p>【画面】司会、手話通訳者、文字通訳</p> <p>↓</p> <p>※以下、省略</p> <p>↓</p> <p>◆質疑応答（15時25分～15時50分）（25分間）</p> <p>司会、質疑応答の進行</p> <p>※質疑応答時、発言者は冒頭で名乗ってから話す</p> <p>※Q & Aに寄せられた質問については、司会が代読。</p> <p>※質疑応答時は、画面共有の使用は認めない（手話・文字の映りを少しでも大きく見せるため）</p> <p>【画面】①司会、②司会が指定した登壇者、③手話通訳、④文字通訳</p> <p>→質問の内容が変われば、②のみ変わる。質疑応答では画面に映るのは①～④の4枠。</p> <p>↓</p> <p>以下、省略</p> <p>↓</p> <p>◆全体終了の挨拶 16時00分終了予定</p> <p>↓</p> <p>退室</p>

資料出所）山下幸子教授の作成した進行表に筆者が適宜手を加えた。掲載を許可していただいたことに、お礼を申し上げます。

注1）画面に「話している人」と「手話通訳者」と「文字通訳」の3名（多くても4名）しか登場していない理由は、「手話通訳者」と「文字通訳」の映っている画面を大きく保つためである。それゆえ、発言を終えたらマイクだけでなく、ビデオもオフすることが重要である。

注2）誰が何を話しているかという基本的な情報保障の実現のために、発言者は必ず毎回名乗る（名乗らなかった場合は、司会者や他の登壇者がフォローをする）、発言が重ならないようにする、ゆっくり話すといったことが求められる。

4. おわりに

「コロナ禍」において、シンポジウムなどがオンライン配信されるようになったことは、災厄に強いられるものであったとはいえ、研究機関の情報発信のあり方に大きな可能性をもたらしたと考えられる。生存学研究所オンライン事務局も、状況に迫られるなか、ユニバーサルな情報保障のともなう情報発信と、障害学国際セミナーのオンライン上での開催と発信に取り組んできた。本稿において大まかに述べてきたように、うまくいった点とうまくいかなかった点がある。いずれも広く知ってもらうことによって、今後の情報保障のあり方に役立てば幸い

である。

障害者差別解消法によって「合理的配慮」の提供が求められるようになったこともあり、今後は、研究機関が情報発信を行う際、情報保障がともなっていることは必須になると考えられる。川端報告にあるように、立命館大学土曜講座においても、情報保障の実装化に向けて動いているという。このような流れがさらに広がることを願う。

注

- 1) 障害学国際セミナーに関わる記述は、arsvi.com 内に掲載された記録を参照した (2022 年 2 月 8 日取得、<http://www.arsvi.com/a/kjdsf.htm>)。
- 2) また障害学会第 17 回大会においても、中井、安田、橋口の 3 名で報告を行った。中井・安田 (2020) と中井・橋口 (2020) を参照のこと。

参考文献

- 中井良平・安田智博, 2020, 「「障害学国際セミナー 2020」における、生存学オンライン事務局の取り組み その 1——オンライン事務局の設置・障害学国際セミナーに向けて」(障害学会第 17 回大会報告)
(2022 年 2 月 8 日取得, <http://www.arsvi.com/2020/20200919nr2.htm>).
- 中井良平・橋口昌治, 2020, 「「障害学国際セミナー 2020」における、生存学オンライン事務局の取り組み その 2——障害学国際セミナーの様子と、今後への課題」(障害学会第 17 回大会報告)
(2022 年 2 月 8 日取得, <http://www.arsvi.com/2020/20200919nr3.htm>).

